医療法人社団英明会　大西脳神経外科病院

大西脳神経外科病院だより　第 19号

ぷれいん

発行日:平成21年2月吉日
発行人：学術図書委員会
発行責任者：大西　英之
編集責任者：吉野　孝広

大西脳神経外科病院の理念

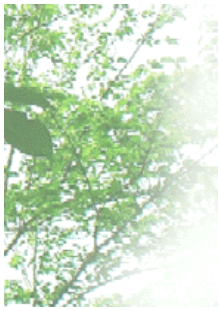
生命を尊厳し、科学の心と芸術的技術と人間愛をもって病める人々に奉仕する。

大西脳神経外科病院の基本方針

生命と人権を尊重した医療を実践する。
神経疾患の専門的高度医療を実践する。
常に新しい医学の修得に励む。
救急医療は医療の原点と考え、24時間対応する。
地域の医療機関との連携を密にし、地域協力型の医療を志向する

原点を見つめなおす

医療法人社団　英明会　大西脳神経外科病院　理事長・院長　大西　英之



今年もよろしく
お願い申し上げます。

当院は２０００年１２月の開院以来、早いもので丸８年が経ちました。開院前には建物や設備の構想に１年を費やしました。さらに病院の建築と人材の確保に１年が必要でした。その頃から考えますと実質丸１０年が経過したと言うことになります。この１０年の間に、私が当初から構想していた病院のインフラストラクチャーはすべて整える事が出来ました。

２００５年には病院機能評価の認定を受け順次、7対1の看護基準、脳卒中治療ユニット（SCU）、脳血管疾患リハビリテーションⅠの取得、念願であった医療法人化も行いました。またMRI、DSA、超音波診断装置などの検査機器の更新及び増設もありました。そして、昨年は2年越しの事業であった電子カルテシステムとPACSが本格稼動しました。稼働に際しては職員が一丸となり頑張って頂き、本当に感謝しています。これら、病院の骨格が出来上がったうえで、今後の方向性を考えてみますと、今年はやはり原点に戻り、「医療の質」のなお一層の向上を目標とすることにいたしました。いわゆる原点回帰というところでしょうか。

前述のインフラは病院の構成要素としてはとても重要ですが、それ自体が本来の目的ではありません。私たちの目的は、常に最高の医療サービスを患者さまに提供させていただくことにあります。この病院としての原点をもう一度見つめ直す一年にしたいと考えています。今年は病院機能評価の更新もあります。患者さま、地域の医療機関の皆様のご協力をいただきながら、地域の医療の向上になお一層努力してまいります。今年もご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2009年の年頭所感

副院長　垰本　勝司

設備ではなく最終的にはそこに働く人の腕と誠意で評価されるはずです

あけましておめでとうございます。

昨年は私どもにとってITに明け、ITに暮れた1年でした。幸い大きな混乱もなく10月17日に電子カルテが本稼働して一つの山を乗り越えつつあると思っていますが、一山越えれば次の山が見えてくるわけで常に前を向いて進まねばなりません。今年病院は開設から9年目に入り、インフラの整備もほぼ終えて10年を一区切りとすれば仕上げの年とも言えます。次への更なるステップのために我々が今なすべき事は何か。院長の年頭の挨拶にもありましたが、医療の原点に帰って足下を見つめ直し、病院の理念をあらためて思い起こし、医療従事者としての心構えを再確認することがスタートになりましょう。

昨年から吹き荒れている世界経済不況のあおりは当然ながら医療界にも強く影響し、国の医療費抑制政策が更に医療情勢を厳しくしていることは誰もが認識しているところでありますが、その中で高い医療レベルを維持し患者さんから信頼される医療機関である為には、病院の全ての職員が心を一つにして患者さんのために最善の医療を行っていくことしかありません。その基盤としては当然皆が健全な医療経営的感覚を持たなくてはなりませんし、その中で高いモチベーションが要求されます。患者さんが我々の行っている医療を信頼して遠方からでも受診して下さり、一方で近隣の診療所や病院の先生方がその医療レベルを評価して多数の患者さんを紹介して下さることが、我々にとって最も嬉しいことであり、医療従事者としての生き甲斐であります。病院が最新の機器・設備を有することは勿論重要ではありますが、最終的にはそこに働く人の腕と誠意で評価されると私は思っています。今年は病院機能の新たな評価を受ける年でもあります。次なる山に向かって一歩一歩登り始めると同時に、これまで歩んできた道の中で置き忘れてきたものを拾い出して目の詰まった器に作り上げる事が、次への大きな土台になると信じます。この一年はそのための具体的なプランを一つずつ消化していきたいと思っています。どうか本年もご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

ハードを使いこなす一年に

副院長　久我　純弘

昨年はハード面では10月に電子カルテ、PACSの導入、更に年末にはDSAがフラットパネルの最新型に更新されました。制度面では7月からDPCの導入というように非常にあわただしい年でした。とても忙しい急性期病院で、いずれもほぼ順調に導入され、稼動しているのはIT室の方々の努力もさることながら全職員の努力の成果だと思います。

PACSに加え、医局には大型モニターが2面設置され毎日の検討会に非常に役立っています。まさにITの進歩によるもので、約十数年前にオーダリングシステムと画像情報システムをある国立病院で導入したときには画像（中でもDSAなど）を表示させるのに時間もかかり表示できる画像数も限られたものであった記憶があります。ハード面は次々と新しくなりましたが、次はこれらをうまく実際の診療に活用していく必要があります。特に電子カルテは利点も多いかわりに、実際の使用においては多くの制限、欠点もあります。特に外来での入力作業時間は実際の診療に影響する大きな問題です。今年は電子カルテに関しては、運用も含めて日常業務で能率的に使えるように更に改善が必要と思われます。

さて今年の大きな問題はというとやはり病院機能評価の更新です。おそらく年内に評価を受けることになるかと思われますが、その準備を始めなくてはいけません。マニュアルの見直しに始まり院内の設置物の点検、カルテの中身そのものの点検も必要になると思われます。

去年がハードの年なら今年はハードなソフトの１年になりそうです。昨年、充実された最新の設備を使いこなし、実際の臨床、研究に更に発展できるようにみんなで頑張りましょう。

充実された最新の設備を使いこなし、臨床、研究に更に発展できるように頑張りましょう。

2009年　年頭にあたって

看護部長　金川　雅子

今年も健康に留意し益々の活躍を期待すると共に各人の幸せを祈念いたします。

　あけましておめでとうございます。
みなさまに於かれましては輝かしい新年をお迎えのことと存じます。
　昨年を振り返ってみますと病院挙げての取り組みであり念願でもあったＤＰＣ・電子カルテが稼動し、Ｘ線撮影・手術・検査等の機器類も更新バージョンアップする等ソフト面ハード面に於いても忙しいながら充実の年でもありました。
当院の最も誇れる体制は、目標に向け職員が一丸となって取り組む姿勢ではないかと思います。この姿勢が短期間にも拘らず誰一人脱落者を出すことも無く電子カルテへの移行を可能にしたと実感しております。
　看護部独自の取り組みとしては、まず「看護必要度」が上げられます。7対1入院基本料取得病院に対する看護必要度が義務付けられたからです。看護必要度は、入院患者の看護サービスの評価基準であって、Ａ項目は患者に行われた治療や処置、モニタリングなど9項目の24時間状況評価であり、Ｂ項目は測定時の患者自立度評価７項目の計16項目を評価基準に基づき全員に実施し、Ａ項目2点以上かつＢ項目3点以上の患者が1ヶ月平均10%以上という条件になっています。
毎日全患者を対象に行われるため看護師全員が同じ評価基準を持ち自身の受け持ち患者さんの評価ができなければなりません。そこで主任会が中心となり全体研修、事例研修、個別研修を繰り返すと共に評価表や集計表、マニュアル等を作成し、4月より試行、7月届出を行いました。そしてこの看護必要度評価は現在も毎日実施しております。また、院内外研修や研究発表にも積極的に参加することができました。

　第11回日本病院脳神経外科学会をはじめ第5回全日本病院協会等主催研究発表会、看護協会東播支部研究発表会への研究発表や雑誌への投稿を行いました。長期院外研修（7週間）では、看護管理ファーストレベル研修に川中主任と浦川主任が参加し、サードレベルには上原副部長が参加しました。上原副部長は終了後引き続き認定管理者試験を受験し見事認定を獲得しました。
この認定看護管理取得者はサードレベル修了など一定の条件をクリアーした者が受験することが出来、全国18万看護免許取得者の内519名が認定を得ています。いずれも大学病院や大病院の看護部長達であり当院のような100床以下の新設病院は非常に

珍しいケースです。このように看護部に於きましても安定した充実の年でもありました。
　今年は、機能評価Ｖ６への更新年となります。電子化対応の操作マニュアルはあるものの、看護業務や記録など現存マニュアルの電子カルテ対応見直しも急務。院長の年頭あいさつより「原点に返って・・」とのお話もあり、もう一度「看護とは」を見直し地に足を着け、機能評価更新に向け取り組んで頂きたい。
今年も健康に留意し益々の活躍を期待すると共に各人の幸せを祈念いたします。

「看護とは」を見直し、地に足を着け、機能評価更新に向け取り組んでいきたい。

今年の抱負

副看護部長　上原　かおる

昨年は、電子カルテ，オーダリングシステム，DPC，看護必要度，脳卒中地域連携パスの導入、私事ではサードレベル受講，認定看護管理者の取得といった、非常に忙しく、でも充実した1年でした。

今年は、病院機能評価更新の年であり、IT化による病院マニュアルの大幅な見直しなど取り組むべき課題は山積しています。少しずつ山を崩していかなければと思っています。また、昨年より院内IT化が進められていますが、看護部に於いてはまだ使いこなすまでには至っておりません。

今年は次のステップとして、より質の高い医療を提供するためのツールとしてPCを活用できるようにしたいと考えています。さらに認定看護管理者として、この医療界の激しい変化に柔軟に対応できる組織作りを目指し、取り組んでいきたいと思います。

また今年も忙しい一年になりそうです。とにかく体調管理をしながら頑張っていきたいと思います。皆様よろしくお願いいたします。

新たな気持ちで

看護師長　安川　明子

あけましておめでとうございます。昨年の看護部はSCUの本格稼働や学会への参加、電子カルテの稼働など、息つく間もなく時間が過ぎたように思います。SCUの稼働に際しては、その運用もはじめは手探りでしたが、何度も検討を繰り返し、急性期にある患者様が安心して療養できるような環境を整えることを目標にスタッフで協力し合えました。また、電子カルテの準備においても、みんなが苦手意識を克服して前向きに練習に取り組んでくれたことや、主任会を中心とした細部にわたる準備が今のスムーズな業務につながったと思います。

今年も昨年の体験を土台に、新たな気持ちで、業務の見直しや看護研究、チームの強化に取り組んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

今年の抱負

副看護部長　木村　ひとみ

おめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

今年のお正月は、近くの神社へ初詣に出かけました。今年はどんな年になるのかと期待を胸に、おみくじを引きました。結果はなんと凶。新年早々気分は、ブルー。気分を変えようと思い、ある占い師の本を買って読みました。今年は、大殺界しかもど真ん中です。踏んだり蹴ったりの状況で、新年を晴れ晴れと迎えられずスタートしました。しかし、あまり細かいことは気にせずに、何とかなるさの気持ちで今年もマイペースで頑張りたいと思います。

仕事の面では、今年の外来活動目標として、手術を受けられる患者さまや化学療法を受けられる患者さまへの対応を充実させたいと考えています。患者さまの個別性に応じた配慮が出来るように心がけたいと思います。

スタッフの皆様、ご協力お願いします。最後に、２００９年が良い年でありますように。

EKIDENとラグビー

事務部長　岡田　惇也

駅伝はすっかり新年の風物詩になりました。個々の選手がトップクラスでなくてもチームとして一番になれる可能性がある駅伝（英語でもEKIDEN）、世界中で人気スポーツになりつつあります。ひとつ問題があるとすれば、ランナーが走り続けられなくなれば次の選手にタスキを渡すことができなくなり、レースから除外されてしまうことです。今年も箱根駅伝でそんな悲劇がありましたが、そうなった選手は自らの責任を果たすため、監督が止めなければ死ぬまで走ろうとするでしょう。その光景はＴＶニュースとしてはいいネタかも知れませんが、彼は生涯二度と駅伝を走れないと思うと残酷です。

一方、もう一つの新年の人気スポーツのラグビーでは、あと数歩で逆転のトライをしようとした選手が、惜しくも相手選手にタックルで倒された場合、気持ちとしては、這ってでもボールをゴールエリアに持ち込みたいでしょうが、ルールではボールを手離さなくてはいけません。その代わり、味方の他の選手がそのボールを拾ってトライすることができます。倒された選手は、何のペナルティもなく競技に戻ることができます。駅伝が「個人責任」の競技とすれば、ラグビーは「バックアップ」の競技と言えましょう。

組織や企業の営みは多数の人が業務をつないでいく「駅伝」形式ですが、組織として永続するためには、誰かが病気をしたら代わりの人が業務を代行し、病気が治った人は復帰できる「ラグビー」形式でなくていけないと思います。しかし、営利を考慮しなければいけない組織では、常にバックアップを用意するわけにはいけません。ＴＶを見ていた私はいつかうたた寝をし、「私はこの仕事は完璧にできます。さらにＡさんの仕事を急にやれと言われたら８０％できる自信がありますし、Ｂさんの仕事でも６０％できます」という職員がたくさんいる病院の夢を見ていました。

薬薬連携をもっと!!

薬剤部　部長　吉田　善子

医薬品の安全管理のなかで、現在、全国的に問題になっているのが、入院時の持参薬の取り扱いです。
以前と比べ、診療報酬の引き下げや、DPC施行医療機関での負担軽減及び資源の有効利用の観点から持参薬の利用が急激に増加しています。当院でも脳外科の単科病院であることも加わり同じ状況にあります。

本来、持参薬についての情報は、入院前に患者が通院していた医療機関の医師から情報提供の内容として記載が行われるべきですが、その内容に医薬品の規格もれや、用法が不明瞭な場合もあります。入院時に持参薬の検薬を薬剤師が行っていますが、薬袋の記載内容と中の医薬品が違っていたり、薬剤情報提供書以外の医薬品が混ざって入っていることもあり、正確な情報を主治医に伝えるのに苦労しているのが現状です。持参薬を安全に使用するためには、現在服用中の医薬品についての正確な情報提供が必要です。

病院でもお薬手帳の活用を行う等、病院の薬局や調剤薬局がお互いに情報提供し合える薬薬連携も今後重要になってくるのではないでしょうか？

病院の薬局や調剤薬局が情報提供し合える「薬薬連携」も今後重要です

地域医療連携パスへの取り組み　　地域医療連携室　主任　越智　信成

　あけましておめでとうございます。
　昨年は電子カルテ・PACS導入やDPCへの参加など病院内インフラが整備されました。地域医療連携室としても地域連携パスと後期高齢者退院調整への加算新設がありました。今年は病院機能評価を見据えながら、前述を基礎に内容の充実を図っていきます。特に地域連携パスの用紙の記入について各部署の皆様には大変ご協力を頂いております。電子カルテ上の操作や地域連携室・MSWとの連絡等についてご要望をどんどん挙げていただき、各部署との協力関係を強くしていきたいと思っています。よろしくご指導のほどお願いいたします。また、当院から直接自宅に帰られる方への対応（フォロー）について、医療機関や介護事業所との連携が数年来課題として残っています。こちらもなんとか今年は形にしていきます。
　今年も院内各部署の皆様にはいろいろとお世話になると思いますが宜しくお願い申し上げます。

３年目を迎え　　栄養科　管理栄養士　清水　里衣子

あけまして
　　おめでとうございます。
　昨年は電子カルテと給食システムが同時に導入となり、業務に大きな変化があり、そして準備に大変な一年でした。導入にあたって、注意を払って様々なことを検討してきたつもりでしたが、稼働後に気付くことも多く、主に給食システム稼働後の調整が続いてます。
　給食システムの導入は初めての経験だったので、分からないことも多く、稼働後もシステムトラブルが多かったため、周りの方々にご迷惑をおかけして申し訳なかったことと、色々と相談にのって頂いたり検討会をひらいて頂いたり、本当にありがとうございました。
　私も当院に勤め始めてから２年と少しが経ち、２００９年はちょうど３年目を迎える年になります。「仕事に慣れるのは3年目から！」と周りから言われていたこともあって、ひとつの目標の様に思っていましたが、あっという間の２年間でした。新しいことを多く経験させていただき、とても嬉しく思っています。
まだまだ経験不足ですが、患者さまや職員の皆様のお役にたてるよう今年も頑張りたいと思います。

新たな目標　　ITシステム管理室　副室長　中田　隆司

　昨年は１０月の電子カルテとＰＡＣＳの稼働を目標に端末１００台以上、サーバ２０台以上の設置と稼働管理とWG（ワークグループ）で院内業務の確認や教育・マスターの準備に追われた毎日でした。
　稼働後は利用する各部署がスムーズに運用できるよう問合せ対応に駆け回る毎日を繰り返し、年が明けて１月になると徐々に落ち着くかと思ったのですが相変わらず院内を駆け回ったり業者に問合せを行ったりと忙しい毎日が続いています。
今年は病院機能評価の更新と言う一大イベントがあり、私個人としては初めての事で何をするか判らず少々不安ではありますが、同じ部署の川村副室長と相談しながら一大イベントを乗り切って行こうと考えています。
　もう一つの目標は、病院の唯一の収入源を管理している医事課業務の流れを理解して医事会計システムに問題があっても状況確認や対応が的確にできるようにする事を目指していきます。

一年の計は元旦にあり

臨床検査科　主任　　住友　泉

明けまして
　　おめでとうございます。

一年の計は元旦にありと言いますが、私も正月には年度ごとに目標設定をすることにしています。昔は自分の人生の方向性が定まらないせいもあって、こうなったらいいなとかこうなればいいなあなど漠然としたもので、目標というより夢や希望、理想みたいなものでした。

しかし、ここ７，８年くらいから目標の内容が年々より具体的で短期的に区切って立てれるようになりました。目標を立てるだけでなくそれを達成するための計画も立てるようにしています。そうするようになってから効率的に物事が決断でき、あまり迷わずに行動できるようになりました。そのせいか目標の達成率はぐんとアップしてきたと実感しています。とはいえ現実は厳しく、思ったようにいかないこともしばしばありますし、予想できない事態に遭遇してしまうこともあるので目標や計画の修正が必要になってきます。逆に幸運なチャンスに恵まれ思ったより早く目標が達成できることもありますので、毎年お正月には過去一年を振り返りじっくり修正して新たに正しい目標を立て直す良い機会と思っています。

今年は大きく修正する必要がありましたが、漠然と思っているだけでは前に進めないので、実行して行動して今年もどんどんステップアップし、仕事もプライベートも益々充実させたいと思います。

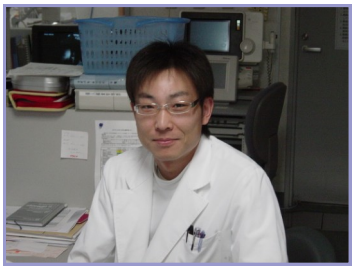
原点に戻って

臨床放射線科　主任　佐藤　直隆

撮影を行い暗室でフィルムを現像機に通し、出てきた写真をシャウカステンで眺める。新人の頃は、X線出力の設定を微妙にコントロールできず、真っ黒な写真が出てくるということも多々あり、非常にドキドキしたものだ。技師の腕により写真の良し悪しが左右されるレントゲンフィルムが無くなりつつある今、時代の流れとはいえ少し寂しい感じがする。

昨年１０月にPACSを導入しフィルムレスへと移行した。フイルムに費やされる人件費、時間は無くなり、画像はというと院内のすべてのHIS端末で読影が可能となった。

２００９年を迎え、毎日何事もなく業務しフィルムの存在はもう忘れつつある。モダリティのすべてがデジタル化され、ある程度システムを理解すればそれなりに良い画像が提供できる。しかしこういう時だからこそ原点に戻り、撮影の基本を見直し、“放射線技師だからこそ出せる画像”を今年のテーマに活動していきたいと思います。



血管撮影装置　SIEMENS社のAXION　Artis　dBA Twinが本格稼働しました。X線管球とフラットディテクタがそれぞれ２つある、バイプレーンシステムです。画像の歪が少なく、さまざまな３D画像が作成でき、画質・WorkFlow共にIVRにも適した装置です。

油断大敵！

リハビリテーション科　技師長　吉野　孝広

臨床での経験はともすれば、過信となり油断を生む。そんな時は自分が油断していることを自覚することもないし、油断という言葉さえ浮かんではこない。誰かに指摘されない限り自分の油断から起こっている見落とし、ケアレスミスは判らない。

何らかの形で問題が表面化したとしても、次は気をつけようと安易に一日の出来事として片付けてしまう。自分にとっては些細なこと、ちょっとした見落としなのかもしれない、次の成功に生かせれば「失敗は成功の糧」となるであろう。…実に身勝手な医療従事者の考えである。

急性期に病態が変化するのは当然のことで、悪化してもそれは仕方のない病理的変化だと自分勝手に解釈し、自分が行った行為に問題があったかどうかなど考えることもなく次の業務に移る。これでは「失敗は成功の糧」にもならない…

理学療法士になって20年が経つ、自分としてはそれなりに、いや結構な誇りを持って仕事に打ち込んできた。性格的には本当に飽きっぽい、最後まで続かないのが自分であるがこの仕事にだけは未だに何か足りないものを求めている…つもりである。

しかし!!　「油断大敵」今年も一年気を引き締めてリハビリテーション科をまとめていきたいと思う。みなさま御指導御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

関心　「山本五十六の言葉」

作戦検討中の
山本五十六　長官

山本五十六　（1884年 － 1943年）やまもと いそろく、大日本帝国海軍の軍人。26、27代連合艦隊司令長官。戦死時の階級は海軍大将で、死後元帥に特進。 当時日独伊三国軍事同盟や日米開戦に最後まで反対していた。 日米開戦が開始されると「短期決戦・早期和平」という日米間に於ける国力の差を冷静に分析し、現実的な作戦計画を実施しようとした。 大日本帝国海軍の中でも傑出した名将としての評価は今日でも高く、敵であったアメリカ側からも山本五十六を賞賛する意見が多い。

また、彼の教育者としての側面は今も高く評価されており、教授者の心得として山本五十六の語録に見られる「やってみせ　言って聞かせて　させて見せ　ほめてやらねば　人は動かじ」「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず」「やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず」などは医学教育の場面でもよく耳にする。

私も学生時代にこの言葉を聞かされ山本五十六の存在を知った一人である。

教育は教えて育てる事ではなく、教えることで自分が育つことだと最近は実感する。

編集後記

ふと、開院当初からの「ぶれいん」を見返した。その都度思い入れがあり懐かしく思えた。病院を去った職員、新しく仲間として加わった職員、多くの出会いと別れが今の病院の礎としてあるのだと思う。院内のお便りとして始まり、現在は近隣の施設に配布されるようになり内容も変化してきた、病院の歴史を振り返った時の誘導灯のような役割を果たせれば幸いである。

職員の皆様には毎年慌ただしい年末年始の原稿依頼を快く引き受けていただきありがとうございます。今後ともご迷惑をおかけすると思いますが温かく見守って頂ければと思います。　（吉野）